毛宗崗本『三國志演義』における女性の忠

仙石知子

はじめに

『三國志演義』（以下、『演義』）は、義を敷衍する物語である。義という儒教の徳目は、忠義と竝稱されることが多い。しかし、毛宗崗批評『三國志演義』（以下、毛宗崗本）は、「義絶」關羽の表現の中で、忠を削除して、義を強調することが多かった。[1] 忠よりも義を優先する表現が見られるのである。

また、『孝經注疏』で「百行の先」と位置づけられる孝は、[2] 時として忠と兩立しない場合がある。『演義』が題材とする三國時代には、忠孝先後論爭と呼ばれる、忠と孝が矛盾した場合にどちらを優先すべきかという議論が、曹魏の文帝の朝廷で行われていた。[3] 忠を強要する曹丕に、邴原は憤然として孝の優先を貫く（『三國志』卷十一　邴原傳注引『原別傳』）。この邴原の逸話を『演義』は收錄しない。

このような義や孝との關係性の中で、毛宗崗本は、どのように忠を表現したのであろうか。本稿は、『演義』における忠の表現の中から、とくに女性に關わる忠を檢討することにより、毛宗崗本における忠の表現の一端を明らかにするものである。

一、忠孝の葛藤

三國時代に「忠孝先後論爭」が行われたように、君主のために忠を盡くして死ねば、親を養う孝を盡くせなくなる。毛宗崗本は、母を捕らえられ、劉備のもとを去って曹操に仕え

ざるを得なくなる徐庶とその母の描寫において、こうした忠と孝との葛藤を描き出す。

曹仁の八門金鎖の陣を破った「單福」という新しい劉備の軍師が、徐庶であることを知る程昱は、徐庶を歸服させるために至孝な人となりを利用すべきであると曹操に進言する。それを毛宗崗本・第三十六回は、次のように描く。なお毛宗崗本の評は【　】で示す。

程昱は、「徐庶は生まれつき親孝行な男です。【「忠臣を求むるには、必ず孝子の門に於てす」と。庶はすでに孝子であるので、曹操に用いられるはずはない。】幼くして父を亡くし、老いた母だけが生きています。今は弟の徐康もすでに死んでおります。老いた母の面倒をみる者はいません。丞相は人をやり徐庶の母を欺いて許昌に連れてこさせるのです。（母に）息子を呼ぶ手紙を書かせれば、徐庶は必ずこちらへ來ます。【丞相として徐庶を辟召するのではなく、母を理由に徐庶を招くのである。もとより徐庶が辟召に應じないことを知っているからである。[4]】

毛宗崗本は、『三國志』卷十四　程昱傳注に引く「徐衆の評」を典據に、「忠臣を求むるには、必ず孝子の門に於てすと」と評をつける。この言葉は、『孝經緯』に基づくもので、漢代において儒教理念の根底に置かれた孝を臣下としての忠に轉化していくための論理として用いられたものである。[5] 毛宗崗本は、忠孝を矛盾するものではなく、孝が忠へと繋がるものである、という立場を宣言する。そのうえでなお、兩者の葛藤を描いていく。

程昱の助言のあと、曹操は人をやって徐母を連れて來させ、徐母に手紙を書くように勸める。その際、曹操は、徐母から劉備のことを聞かれ、劉備のことを惡く言う。それを聞いた徐母は怒り、曹操に硯を投げつける。この部分の表現は、毛宗崗本が藍本とした李卓吾本と次のように異なっている。李卓吾本から掲げよう。

徐母兩目圓睜、厲聲而言曰、汝何虛誑之甚也。吾久聞玄德乃中山靖王之後、漢景帝閣下玄孫、有堯舜之風、懷禹湯之德。〔好婆子。〕況又屈身下士、②恭已待人、世之黃童白叟、牧子樵夫、皆知其名。眞當世之英雄也。吾兒輔之、得其主矣。汝雖托名漢相、實乃漢賊。却言玄德爲逆臣。〔①聖婆聖母。漢朝第一忠臣也。〕豈不自恥。如何使吾兒背明投暗、惹萬代之罵名乎。言訖、③投筆于地、取石硯便打曹操。（李卓吾本・第三十六回）

徐母は両目をキッと見開いて、激しい口調で「あなたの話はまったくのでたらめ。わたくしがかねてより聞いているのは、玄德様とは中山靖王の末孫、漢の景帝閣下の玄孫に當たり、堯舜の風を學び、禹湯の德を懷くお方であるということです。〔素晴らしいご婦人だ。〕その上また遜って賢者を招き、②恭しく人を貴び、世の子供から老人、牛飼いや樵まで、みながその名を知っております。眞に當世の英雄です。わが息子はこの方を助け、主を得たのです。あなたは漢の丞相を名乗りながらも、實際には漢の國賊です。それなのに玄德様を逆臣と呼んでいます。〔①聖婆聖母である。漢朝第一の忠臣である。〕自ら心に恥ずべきです。わが息子に明君に背き暗君に投じさせるようなことがあれば、萬代の悪名を取らせるようなもの」と言った。言い終わるや、③筆を床に投げつけ、硯を手にすると曹操に投げつけた。

以上の部分を毛宗崗本は、次のように書き換えている。書き換えの部分には、番號をつけた傍線を附し、李卓吾本の該當部分にも番號をつけて波線を附した。

徐母厲聲曰、汝何虛誑之甚也。吾久聞玄德乃中山靖王之後、孝景皇帝閣下玄孫。【說玄德的是宗室。】屈身下士、❷恭己待人、仁聲素著。世之黃童白叟、牧子樵夫、皆知其名。眞當世之英雄也。【說玄德的是好人。】吾兒輔之、得其主矣。【破美玉汚泥句。】汝雖托名漢相、實爲漢賊。【破天子之前保奏句。】乃反以玄德爲逆臣。【破逆臣背叛句。】欲使吾兒背明投暗、豈不自耻乎。【破作書喚回句。先極口讚玄德、後極口罵曹操、比禰衡・吉平尤爲痛快。】言訖、❸便取石硯打曹操。【此一石硯抵得博浪椎。】（毛宗崗本・第三十六回）

徐母は激しい口調で、「あなたの話はまったくのでたらめ。わたくしがかねてより聞いているのは、玄德様とは中山靖王の末孫、孝景皇帝閣下の玄孫に當たります。【玄德が宗室であることを言っている。】遜って賢者を招き、❷恭しく人を貴び、仁との名聲がもとより高いお方であるということです。世の子供から老人、牛飼いや樵まで、みながその名を知っております。眞に當世の英雄です。【玄德がいい人であることを言っている。】わが息子はこの方を助け、主を得たのです。【美玉を泥中に汚したという（曹操の）話を論破する言葉だ。】あなたは漢の丞相を名乗りながらも、實際には漢の國賊です。【天子に奏上するという（曹操の）話を論破する言葉だ。】そ

毛宗崗本『三國志演義』における女性の忠（仙石）

れを反って玄徳様を逆臣と呼んでいます。【（劉備を朝廷に）背反する逆臣と呼ぶ（曹操の）話を論破する言葉だ。】わが息子に明君に背き暗君に投じさせようとするとは、自ら心に恥じないではおられましょうか」と言った。【手紙を書かせて呼び返してほしい（という曹操の）話を論破する言葉だ。先ず口を極めて玄徳を賞賛し、後で口を極めて曹操を罵倒するのは、禰衡・吉平よりさらに痛快である。】言い終わるや、❸すぐに硯を手にして曹操に投げつけた。【この一つの硯は（張良が秦の始皇帝に）博浪で投げた椎にあたる。】

二つの『演義』の表現を比較すると、第一に李卓吾本は、①「聖婆聖母である。漢朝第一の忠臣である」という評をつけ、徐母を稱賛している。これに對して、毛宗崗本は、徐母を「漢朝第一の忠臣」とする評を踏襲しない。徐母の忠への行き過ぎた賛美は、結果的に徐母を死に至らしめてしまった徐庶の孝を貶めることになるためである。ここに、毛宗崗本が、忠と孝との葛藤を表現しようとしている一例を見ることができる。

第二に、毛宗崗本は、李卓吾本にはなかった、劉備が❷「仁」であるという高い評價を加えている。徐庶に母のもとに歸る孝を優先させる劉備は、孝よりも高次の道德である「仁」の名聲高き者として描かれる。この書き加えにより、劉備が君主にとって優先度の高いはずの忠ではなく、なぜ孝を優先したのか、が明らかとされる。

第三に、李卓吾本は、曹操を罵倒したのち、③「筆を床に投げつけ」てから、硯を手にして曹操に投げつけた、とするが、毛宗崗本は、言い終わると❸「すぐに」硯を投げたとする。筆を投げ捨てる描寫を削除することで、徐母の怒りを強調している。

このように、毛宗崗本は、徐母に對する「漢朝第一の忠臣」とする李卓吾本の評を踏襲しないものの、けっして徐母の「忠」を貶めているわけではない。それは、毛宗崗本・第三十六回の總評からも理解できる。

高漸離は筑によって秦の始皇帝を擊ち、始皇帝は高漸離を殺した。徐母は硯によって曹操を擊ち、曹操は徐母をあえて殺さなかった。これは徐母の威が高漸離よりもさらに烈しかったことによる。張良は秦の始皇帝を擊って中たらず、秦に執えられなかった。徐母は曹操を擊って中たらず、曹操に執えられた。これは徐母の膽が張良よりもさらに壯であったことによる。すぐれた婦人はすぐ

れた男子より勝るほどで、ただ列女傳の中にこれを罕にしか見られないだけでなく、豪士傳の中にもこれは罕にしか見られないことである。(6)

このように、毛宗崗本は、徐母が曹操に硯を投げつけたことを秦の始皇帝の暗殺を圖った高漸離、さらには始皇帝の暗殺を計るばかりか、劉邦の前漢建國を助け「漢の三英」と呼ばれる張良に匹敵するものとして、きわめて高く評價している。毛宗崗本は、徐母の行爲を漢を蔑ろにする曹操への暗殺と讃え、その漢への忠を宣揚しているのである。

程昱の僞手紙を受け取り、それを信じた徐庶は、母が曹操のもとで辛い目に遭っていると思い、曹操に歸服することを決める。それを聞いた劉備は、忠よりも孝を優先すべきであるとし、徐庶を曹操のもとに送り出す。李卓吾本から掲げよう。

①玄德哭曰、子母之道、乃天性也。元直無以備爲念、而割其天愛。待與老夫人相見之後、再從聽教。(李卓吾本・第三十六回)

①玄德は泣きながら、「子と母の道は、天性のものだ。元直殿はわたしのことを心にかけ、天性の愛を割くことはない。母上に會われたあと、再び會うこともあろう」と言った。

これに對して毛宗崗本は、次のように改めている。

❶玄德聞言大哭曰、子母乃天性之親。元直無以備爲念。待與老夫人相見之後、或者再得奉教。【玄德更不相留、❷眞善體孝子之情。】(毛宗崗本・第三十六回)

❶玄德は聞いて大きな聲で泣きながら、「子と母は天性の親だ。元直殿はわたしのことを心にかけることはない。母上に會われたあと、あるいはまたお目にかかることもできよう」と言った。【玄德はことさらに引き留めようとはせず、❷まことに孝子の情を體現している。】

毛宗崗本は、❶「大きな聲で」と、劉備の泣き方を激しくすることで、母子の情を天性の親と捉えていることを強調する。そのうえで、劉備が❷「孝子の情を體現している」と評をつけ、劉備を至孝の人物と表現する。徐母が「漢朝第一の忠臣」であるとの李卓吾本の評を繼承しない代わりに、劉備が「孝子の情を體現している」ことを前面に打ち出しているのである。

やがて、劉備は徐庶に別れの言葉を述べる。ここにも書き換えが見られる。

玄德與盃勸徐庶曰、備分淺緣薄、不能與先生相從聽誨、

望先生善事新主、①以全孝道。庶泣曰、某才微智淺深荷使君重用。今不幸半途而別、實爲母之故也。〔一副好君臣。〕縱曹操逼勒事之、終身不設一謀。②豈不忠也。非所願也。（李卓吾本・第三十六回）

玄德は盃を徐庶に勸めて、「わたしは緣が薄く、先生の教えを聽くことができなくなりましたが、どうか新しい君主によくお仕えし、①孝の道を全うしてください」と言った。徐庶は泣きながら、「わたくしめは才智が少なく淺いにもかかわらず、君は重用してくださいました。今不幸にも中途にて別れるのは、實に母のためでございます。〔一組の素晴らしい君臣である。〕たとえ曹操に迫られ仕えることになっても、生涯（曹操のために）謀は獻じることはございません。どうして（劉備に）②不忠となることができましょうか。わたくしが望むところではありません。」

これを毛宗崗本は、次のように書き換えている。

玄德擧盃謂徐庶曰、備分淺緣薄、不能與先生相聚、望先生善事新主、❶以成功名。【還將舊來意、憐取眼前人、何其言之痛也。】庶泣曰、某才微智淺、深荷使君重用。今不幸半途而別、實爲老母故也。縱使曹操相逼、庶亦終身不設一謀。【是血性語。其急歸見母、則依依孺子。其誓不佐操、則烈烈丈夫。】（毛宗崗本・第三十六回）

玄德は盃をあげ徐庶に、「わたしは緣が薄く、先生とご一緒することはかないませんが、どうか新しい君主によくお仕えし、❶功名を成し遂げてください」と言った。【（元稹の「告絶詩」に）「還た舊來の意を將て、憐取せよ眼前の人を」（とあるような）、なんと痛ましい言葉であろうか。】徐庶は泣きながら、「わたくしめは才智が少なく淺いにもかかわらず、君は重用してくださいました。今不幸にも中途にて別れるのは、實に老いた母のためでございます。たとえ曹操に迫られ仕えることになりましても、わたくしは生涯（曹操のために）謀を獻じることはございません」。【これは血のかよった言葉だ。急いで母のもとに驅けつけるというのは、思い憂う子供だ。曹操に謀を獻じないというのは、激しい男だ。】

第一に、毛宗崗本は、李卓吾本の①「孝の道を全うしてください」という劉備の徐庶への言葉を❶「功名を成し遂げてください」と書き換えている。それは、徐庶が曹操のもとに行くことにより、徐母は自殺をするため、孝を全うできないからである。劉備が孝のために徐庶を送り出したことを明記

すれば、徐庶だけではなく、全うできない孝を優先させた劉備をも貶めることになる。毛宗崗本は、それを避けるため、「功名を成し遂げてください」と書き換え、そう言われながらも曹操のもとで功名をあげない徐庶の劉備への忠を浮き彫りにする描寫としている。

第二に、毛宗崗本は、②「どうして不忠になることができましょうか。わたくしが望むところではありません」という李卓吾本の言葉を削除している。曹操に仕えながらも劉備に忠を盡くしたことは、功名をあげない徐庶の行爲から明らかである。その際、劉備のもとを去る前に、徐庶が「不忠」はいたしませんと、劉備に明言していると、徐庶の劉備への忠に強制力が働いていたことになる。しかも、曹操に對して「不忠」をする徐庶の行爲を劉備が容認していることにもなり、劉備の仁なる性格に傷がつく。

このように、毛宗崗本は、李卓吾本に書かれていた「孝」「忠」という直接的な字句を書き換えることにより、かえって徐庶・劉備の孝への思いと、徐庶の强制されない忠を描き出すことに成功している。さらに、毛宗崗本は第三十六回の總評に、徐庶の行動について二つの評をつけることで、その行爲を說明する。

曹操が關公を無理に引き留めなかったのは、兄弟の義を全うさせようとしたからである。玄德が徐庶を無理に引き留めなかったのは、母子の恩を全うさせようとしたからである。二人の心は同じだろうか。それは、違う。曹操の關公に對してのことは、放したふりをして密かに邪魔をしようとして、邪魔をできずにそののち見送ることになった。だが玄德の徐庶に對するようなことは、見送っただけである。そのうえ曹操は（關公を放つことで）袁紹が玄德を殺すことを强く願ったが、玄德はただ曹操が徐母を殺害することを恐れた。一つは僞りで一つは誠であり、天と地の差どころではない。(7)

毛宗崗本の總評は、劉備が徐庶を無理に引き止めなかった理由を曹操と比較するなかで、「母子の恩を全う」させることに求めている。劉備が孝を最優先する人物であることを總評でも確認しているのである。また、總評は次のようにも述べている。

蔡瑁は玄德の詩を僞ったが劉表はこれを疑った。程昱は徐母の書を僞ったが徐庶はこれを信じた。これは庶の智が表には及ばないということではない。母子の情は切實なものだからである。猶豫があれば詳しく調査すること

も容易いが、させまった状況であれば詳しく調べることもできない。他人であれば傍觀していられることも、身内であれば心亂れるものである。もし徐庶が母のもとへ行くのが遲ければ、孝子にはなれない。だから君子は徐庶を誹ることはできないのだ。(8)

ここで總評は、徐庶が母の手紙を疑わなかった理由を示している。親のこととなれば、冷靜な判斷もできなくなるといい、毛宗崗本は、母子の情ゆえに、忠と孝の間で葛藤する徐庶を評價していることが分かる。

曹操に歸服した徐庶が現れると、徐母は今まで學問をしてきて忠孝が兩全しないことを知っていながら、なぜ戻って來たのか、と徐庶を罵る。徐庶を罵る徐母の言葉の中には、次のような違いが見られる。李卓吾本より掲げていこう。

①吾有何面目汝相見、玷辱祖宗之徒、空生于天地之間耳。罵得徐庶、②伏于堦下、不敢仰視。母自轉于屏風後、少時人忽報曰、老夫人自縊于梁間。徐庶慌入救時、母氣已絶。〔死得快活。人生有此等死、大幸也。〕（李卓吾本・第三十七回）

「①わたくしはどんな顔でそなたに會えましょう。祖宗の家門に傷をつけ、どうやってこの世界に生きられるのですか」。罵られた徐庶は、②階の下にひれ伏して、（母の）顔を見ることができなかった。母は自ら屏風の後ろへ行ったが、少しして人が知らせにやってきて、「大奥様が梁で首をくくられました」と言った。徐庶が慌てて入って助けようとしたが、母の息はすでに途絶えていた。〔死ぬことで快さを手にいれた。人生におけるこのような死は、大きな幸せである。〕

これに對して、毛宗崗本は、次のように書き換えている。

❶吾有何面目與汝相見。汝玷辱祖宗、空生于天地間耳。【前罵曹操可敬、今罵徐庶更可敬。罵庶深於罵操矣。】罵得徐庶❷拜伏於地、不敢仰視。母自轉入屏風後去了。少頃家人出報曰、老夫人自縊于梁間。徐庶慌入救時、母氣已絶。【本欲全母之生以歸、乃歸而反速母之死。元直其抱恨終天乎。】（毛宗崗本・第三十七回）

「❶わたくしはどんな顔でそなたに會えましょう。そなたは祖宗に傷をつけ、どうやってこの世界に生きられるのですか」。【前に曹操を罵ったことは敬うべきことだが、いま徐庶を罵ったことはさらに敬うべきことである。徐庶に對する罵りは曹操に對する罵りより深い。】罵られた徐庶は、❷地にひれ伏して、（母の）顔を見ることが

できなかった。母は自ら屏風の後ろへ行ってしまった。少しして家の者が知らせにやってきて、「大奥様が梁で首をくくられました」と言った。徐庶が慌てて入って助けようとしたが、母の息はすでに途絶えていた。【もともと歸って來ることで母を生き長らえさせようとした。だが歸ってきたことで母の死を早めてしまった。元直は生涯恨み悔しさを抱き續けるだろう。】

第一に、毛宗崗本は、李卓吾本で、①「祖宗の家門に傷をつけ、どうやってこの世界に生きられるのですか」としている部分を❶「そなたは祖宗に傷をつけ、どうやってこの世界に生きられるのですか」と書き換えている。「そなたは（汝）」という一字を加えることによって、「生きていけない」主體は、徐母から徐庶に變わる。この書き換えにより、徐母の息子に對する怒り、嘆きが強調されるとともに、子を心配する母の愛情も表現されるのである。さらに、徐母が自殺する意味も變容する。「生きていけない」主體が徐庶であるにも拘らず徐母が自殺することは、自分が恥ずかしいからではなく、徐庶を戒めるための行爲となるからである。毛宗崗本は、「汝」一字を加えることにより、徐母の自殺の意味を大きく捉え直しているのである。

第二に、母に罵られた後の徐庶は、李卓吾本では、②「階の下にひれ伏して」母の顔を見ることができなかった、と形容される。これを毛宗崗本は、「地にひれ伏して」と表現する。それにより、自己の不始末を母に強く詫びようとする徐庶の姿勢が強調されている。

このように、毛宗崗本は、李卓吾本の徐母と徐庶の表現を書き換えることにより、徐母の忠だけを強調する李卓吾本の記述を修正して、忠と孝との狹間で葛藤する徐庶の姿を表現しようとする。そうした兩者の違いは、總評にも現れている。李卓吾本より掲げよう。

徐元直は優れておらず、その母が大いに優れている。まことに元直の母というものは、敬うべきである。もし單福がまたこの母を得られるならば、おかしなことである。[9]

このように、李卓吾本の總評は、徐庶よりも徐庶の母が優れている、とする。李卓吾本は毛宗崗本に比べ、忠と孝の間で葛藤する徐庶を評價していないことが分かる。これに對して、毛宗崗本は次のように徐母と徐庶を評する。

徐庶の母と王陵の母は、ともに賢母だ。王陵の母の死は、息子が楚に歸服するのを恐れたためである。徐庶の母の死は、息子が曹操に歸服するのを怒ったためである。そ

れなのに徐庶の母は曹操に召し出された時に死なず、徐庶が歸服してから死んだ。ある人は死ぬのが遅かったと恨むだろう。わたしは言う、そうではない。曹操は項羽とは比較にならず、項羽は素直で曹操は詐わりである。徐庶の母が先に死んで徐庶の望みを絶とうと思っても、曹操のような奸惡なものは、どうにかその死を祕密にして徐庶に知らせないことは難しくない。またどうにか母の死後に僞の母の書を作って徐庶を招くことも難しくない。これはやむを得ないことで徐庶の母の罪ではないのである。(10)

毛宗崗本は、總評において、徐母を王陵の母と比較する中で、徐母が早く死んでいれば、徐庶が曹操のもとに來なかったのではないか、という疑問を掲げ、曹操の奸僞によりそれはできなかったと辯明している。孝と忠との葛藤に苦しむ徐庶の惱みを曹操の奸僞で解決していく姿勢は、個々の登場人物の心情よりも「三絶」の一人曹操の表現を優先していく毛宗崗本の特徴である。

このように、毛宗崗本は、李卓吾本では母に比べて評價の低い徐庶に關する記述を書き換えることにより、徐庶の孝とその劉備への忠を明らかにするとともに、劉備の仁にも傷がつかないように配慮している。毛宗崗本における女性の忠は、李卓吾本のように、ただそれを贊美するのではなく、忠と孝との葛藤を踏まえて、徐母の忠を描きながらも、徐庶の孝と忠、劉備の仁との共存に配慮した行き屆いた記述となっているのである。

二、曹操への忠

毛宗崗本は、曹操に對する女性の忠を描く場面においても李卓吾本の記述を書き換えている。そこには、どのような特徴が見られるのであろうか。ここでは、第六十四回に登場する姜敍の母と王氏の事例を檢討する。

曹操と對立する馬超に對して、楊阜は、韋康を涼州刺史に推薦し、自ら冀城を守備していた。ところが、馬超の攻擊を受けるうち、韋康は馬超に降服したのち一族皆殺しとされ、抵抗した楊阜はかえって、馬超のもと現職に止まった。楊阜は、亡き妻を葬るため、馬超の許可を得て歸省し、その途中、從兄弟の姜敍の屋敷を訪ねる。そこで、姜敍の母の言葉を聞き、故君の韋康のためにも、馬超に反旗を翻す。楊阜が姜敍の屋敷を訪ねる場面は、李卓吾本では、次のように描かれている。

楊阜過歴城、來見姜敘。敘與阜是姑表弟兄、姜敘乃受漢爵撫夷將軍。①敘母大賢是阜之姑、阜別馬超逕來見姑、哭拜于地而言曰、守城不能完、主亡不能死。愧無面目見姑。且馬超③背父叛君、妄殺郡守。豈獨楊阜憂責、一州士大夫、皆受其恥。今吾兄坐据歴城、竟無討賊之心、此趙盾所以書弑其君。言罷、涙流出血。④後人有詩曰、包胥向日哭秦庭、楊阜今朝慟歴城。欲報冤讐流血涙、千年萬載仰高清。敘母聞知、喚姜敘入、責之曰、韋使君遇害、亦爾之罪。豈獨義山哉。（李卓吾本・第六十四回）

楊阜は歴城を通りかかり、姜敘に會いに行った。姜敘と楊阜は從兄弟同士で、姜敘は漢爵の撫夷將軍を授けられていた。①大賢な姜敘の母は楊阜の伯母であったので、楊阜は馬超と別れると眞っ直ぐに伯母に會いにきて、泣きながら地にひれ伏して、「城を守って全うできず、主を亡くしても死ぬことができませんでした。恥ずかしく伯母様に會わせる顔もございません。そのうえ馬超は③父に背き君を裏切り、みだりに郡守を殺しました。憂い責め咎めているのはこの楊阜だけではなく、州の士民、みな恥を受けております。今わたしの兄上は歴城を統治し、賊を成敗しようという心もないとは、これは趙盾がその君を弑すと書かれたのと同じことです」と言った。言い終えると、激しく泣いた。④後の人の詩に、「包胥日に向かひて秦庭に哭し、楊阜今朝歴城に慟す。冤讐に報ひんと欲して血涙を流し、千年萬載高清を仰ぐ。」とある。敘母はこれを聞くと、姜敘を呼び入れ、（姜敘を）責めて、「韋使君が死んだのも、おまえの罪です。義山（楊阜）だけのせいではありません」と言った。

これに對して、毛宗崗本は、次のように書き換えを行っている。

楊阜過歴城、來見撫彝將軍姜敘。敘與阜是姑表兄弟、敘之母是阜之姑、❷時年已八十二。當日、❶楊阜入姜敘內宅、拜見其姑、哭告曰、阜守城不能保、主亡不能死。愧無面目見姑。馬超❸叛君、妄殺郡守、一州士民無不恨之。今吾兄坐据歴城、竟無討賊之心、此豈人臣之理乎。言罷、涙流出血。【楊阜思報其主、當許貢之客竝稱。】敘母聞言、喚姜敘入、責之曰、韋使君遇害、亦爾之罪也。（毛宗崗本・第六十四回）。

楊阜は歴城を通りかかり、撫夷將軍の姜敘に會いに行った。姜敘と楊阜は從兄弟同士で、姜敘の母は楊阜の伯母であり、❷この時すでに八十二歳であった。この日、❶楊

毛宗崗本『三國志演義』における女性の忠（仙石）

阜は姜敘の屋敷の奥の部屋へ行き、伯母に挨拶をすると、泣きながら「わたしは城を守って守りきれず、主が死んでも死ぬことができませんでした。恥ずかしく伯母様に會わせる顔もございません。馬超は❸君を裏切り、みだりに郡守を殺し、州の士民で奴を恨まぬ者はいないほど。今わたしの兄上は歴城を統治し、賊を成敗しようという心もないとは、人臣の道理があると言えるでしょうか」と告げた。言い終わると、激しく泣いた。【楊阜の主に報いたいという思いは、許貢の客と竝び稱するべきである。】敘母はこれを聞くと、姜敘を呼び入れ、（姜敘を）責めて、「韋使君が死んだのも、おまえの罪です」と言った。

第一に、李卓吾本では、楊阜が姜敘の母の①「大賢」を慕って會いに來た、とされていることに對して、毛宗崗本は、姜敘の母の❶「大賢」という記述を削除している。姜敘の母への評價を下げようとしていることが分かる。

第二に、毛宗崗本は、李卓吾本では馬超に殺害される際に記される姜敘の母の「八十二歳」という年齢を❷「この時すでに八十二歳」と、早く出すことによって、のちに蜀漢に仕える馬超が、八十を超える老母を殺害した惡逆さの印象を弱め、馬超を庇おうとしている。それは、李卓吾本にある馬超と戰う④楊阜を讃えた詩を削除したことにも現れている。[11]

第三に、李卓吾本は、馬超は③「父に背き君を裏切」ったとしているが、毛宗崗本は、❸「君を裏切り」とし、父に背いたことを削除している。史實では、馬超が反亂を起こしたことで、父の馬騰は殺されている（『後漢書』卷十　獻帝紀）。それを『演義』は、父の馬騰が曹操に殺されたために馬超が反亂を起こすと史實を改變して、後に蜀漢に仕える馬超を擁護している。李卓吾本にある「父に背き」という記述は、史實での馬超の姿が混入したものであり、それを毛宗崗本は削除して、馬超の擁護を完全にしているのである。[12]

このように毛宗崗本は、姜敘の母を讃える李卓吾本を書き換え、姜敘の母をそれほどまでに高めようとはしない。それは、姜敘の母が戰った馬超を擁護するためだけなのであろうか。

姜敘は、馬超を討つという楊阜の計畫に力を貸そうとするが、母への孝のために躊躇する。それを知った姜敘の母の發言への評價が、李卓吾本では、次のように書かれている。

敘母曰、汝不早圖、更待何時。誰不有死。死於忠義者、死得其所也。勿以我爲念。汝若不聽義山之言、吾先死矣。以絶汝念。〔賢母〕。（李卓吾本・第六十四回）。

敍母は、「そなたは早く兵を起こさずに、一體いつまで待つというのです。誰でもいつかは死ぬのです。忠義のために死ぬのであれば、これ以上はありません。わたしを案じる必要などない。そなたがもし義山の言うことを聞けないのであれば、わたしが先に死にましょう。そなたの心殘りをなくすために」と言った。〔賢母である。〕

これに對して、毛宗崗本・第六十四回は、字句を少しく改めたのち、「一人の女丈夫である。（首を刎ねられることを恐れぬと言った）斷頭將軍（嚴顏）に準えられる。（一個女丈夫、可比斷頭將軍）」という異なる評をつけている。

毛宗崗本は、李卓吾本が「賢母」と讃える姜敍の母を「女丈夫」と言い、徐母に用いた「賢」という評語を用いない。忠を盡くすことの方が、生きて孝を盡くすことよりも大事で、そのためならば自分は自殺をする、という姜敍の母の發言を評價しないのである。ここにも、一方的に忠を高く評價する李卓吾本と、忠と孝との葛藤に留意する毛宗崗本との違いを見ることができる。

歷城の南門から攻め入ってきた馬超は、姜敍の屋敷に行く。そこには姜敍の母がいた。母は馬超を見ても恐れず、馬超に指を突き立てて罵り、怒った馬超に母は殺される。その場面にも書き換えがある。李卓吾本より揭げよう。

於姜敍宅、拿出老母①年八十有二。敍母全無懼色。指馬超大罵曰、②汝背父無君、逆天之賊。天地久不容留汝。汝不早死、敢以面目視人乎。超大怒、自取劒殺之。③後史官詩曰、賢哉姜敍母、勸子早興兵。報本如山重、捐軀若紙輕。王陵親可竝、孟氏母重生。讀史應哀感、令人兩淚傾。（李卓吾本・第六十四回）。

姜敍の屋敷では、①八十二歲になる老いた母を引きずり出した。敍母は恐れる樣子はまったくなかった。馬超を指さして「②おまえは父に背き君を裏切り、天に逆らう賊だ。天地は一生おまえを許すまい。おまえは生きながらえ、恥じを晒していくがよい」と激しく罵った。馬超は大いに怒り、自ら劍を取って老母を殺した。③後の人の詩には、「賢なるかな姜敍の母、子に勸めて早に兵を興さしむ。本に報ひること山が如く重く、軀を捐つること紙が若く輕し。王陵の親は竝ぶ可く、孟氏の母は生を重んず。讀史 哀感に應じ、令人 兩つながら淚 傾く」とある。

毛宗崗本の記述は、簡潔である。

至姜敍宅、拿出老母。母全無懼色、指馬超而大罵。超大

怒、自取劍殺之。【姜敘又送了一個母親。】（毛宗崗本・第六十四回）。

姜敘の屋敷に行き、老母を引きずり出した。母は恐れる様子がまったくなく、馬超を指さして激しく罵った。馬超は大いに怒り、自ら劍を取って老母を殺した。【姜敘は一人の母を見送った。】

第一に李卓吾本は、馬超が姜敘の母を殺害するこの場面でようやく①「八十二歳」の老母、と姜敘の母の年齢を明記する。毛宗崗本は、「八十二歳」を先に出し、ここからは削除する。また、第二に李卓吾本にある姜敘の母が、②馬超の罪を手厳しく罵る言葉を削除し、罵ったことのみを傳える。また、第三に李卓吾本にあった③姜敘の母を讃える詩を削除している。

このように毛宗崗本が、李卓吾本の馬超を批判する言辭を徹底的に削除するのは、後に蜀漢に仕える馬超を擁護するためである。毛宗崗本・第六十四回の總評は、馬超を次のように位置づけている。

楊阜が韋康のために仇を報じたことは、義である。しかし楊阜が馬超を攻めて曹操を助けたことは、義ではない。馬騰は二回詔を受け、二回賊を討伐しており、もとより漢の忠臣である。その子（の馬超）は父の恨を雪ごうと思っただけで孝であり、父の志を承けて國賊を討とうとしただけで忠である。（楊阜は）一方で君を欺き上を罔する曹操を奉じ、一方で忠孝の馬超を攻め、超を賊とし、操の賊であることを知らない。このため楊阜の義を、君子は取らないのである。[13]

毛宗崗本は、「漢の忠臣」である馬騰の志を受け繼ぐ馬超を「孝」「忠」の體現者と位置づける。この結果、楊阜の義は、國賊である曹操に忠を盡くしたことになるため、君子はこれを認めないとするのである。

以上のように、毛宗崗本は、のちに蜀漢に仕えた馬超を全面的に擁護するために楊阜の義を貶め、さらに孝を犠牲にして盡くした姜敘の忠を評價することもない。それを勸めた姜敘の母を「賢」とする李卓吾本の評價も繼承せず、「女丈夫」との評に止めた。李卓吾本は、孝を捨て忠を盡くすことを絶贊するが、毛宗崗本は、馬超の擁護から分かるように、その忠が曹操に對するものであるため、それほど高くは評價しないのである。

姜敘は、馬超を討つ計畫を尹奉・趙昂にも相談をする。趙昂の息子、趙月は、そのとき馬超の下で部將となっていた。

馬超を討ちに行けば、息子は必ず殺される。そのため、趙昂は妻の王氏に話をする。王氏は、仇を雪ぐためならば、息子一人死んでもかまわない。息子のために實行しないのであれば、自分が先に死ぬと言う。この言葉の後の評に書き換えが見られる。

毛宗崗本は、第一に、李卓吾本の評にある「賢」を「女丈夫」に書き換える。第二に、李卓吾本の評の後にある、子を犠牲してまで曹操への忠を貫く王氏を讃える詩を削除する。

姜敘の母と同様、孝よりも曹操への忠を優先する王氏に對して、毛宗崗本は徐母ほどには、高い評價を與えていないのである。その理由は、總評において、次のように説明される。

人は姜敘の母を太史慈の母と同じであるという。太史慈の母はその子に孔融に報いることを勉めさせ、姜敘の母はその子に韋康に報いることを勉めさせた。これはその嘉すべきことである。わたしは姜敘の母は徐庶の母と異なると思う。❶徐庶の母は曹操が賊であることを知り、姜敘の母は曹操を討つ者（である馬超）が賊ではなく、曹操を助ける者が賊であることを知らなかった。これは惜しむべきことである。人は趙昂の妻を呂布の妻と異なるという。呂布の妻は夫が戰いに出ることを阻み、趙昂の妻は夫が兵を起こすことを勵ました。これはその嘉すべきことである。わたしは趙昂の妻は劉表の妻と同じであると思う。❷劉表の妻は劉備に背き曹操に從い、その身と子は共に死ぬに至った。趙昂の妻は曹操を助けて馬超を攻め、身は幸いにも死を免がれたが、またその子は死ぬに至った。これもまた惜しむべきことである。郭嘉・程昱ら輩のように、天下には智謀の士と稱されながらも、なお順逆を明らかにすることができないものもある。どうして婦人のことだけを問題にできようか。なお論者には楊氏と王氏を譏れないという者もあるという。[14]

毛宗崗本『三國志演義』における女性の忠（仙石）

このように、毛宗崗本は、總評において、姜敘の母を徐母と比べて劣るとし、その理由として曹操に忠を盡くしたことを擧げる。同様に、王氏を劉表の妻と同列とし、その理由を劉備に背いたことに求める。すなわち、李卓吾本が高く評價していた姜敘の母と王氏の忠を毛宗崗本が評價しない理由は、その忠が劉備ではなく曹操に向けられたものであったことによるのである。[15]

三、劉備への忠

それでは、毛宗崗本が高く評價する劉備への忠は、どのよ

うに描かれるのであろうか。

劉備が呂布に敗れて孫乾と共に飢えているときに、一夜の宿を求めたのが劉安という狩人の家であった。飢えた劉備に、劉安は肉を勸めるが、その描寫にも大きな書き換えが見られる。李卓吾本から掲げていこう。

忽到一家投宿。其家一後生出拜、問之、乃獵戶劉安也。①聞是同宗、豫州牧至遍尋野味不得、殺其妻以食之。玄德曰、此何肉也。安曰、乃狼肉也。〔劉安亦奇。〕二人飽食。天晚夜宿。至曉辭去、後院取馬、③見殺其妻于廚下、臂上盡割其肉。玄德問之、方知是他妻肉。④痛傷上馬、⑤欲帶劉安去。安曰、老母見在、不可遠行。玄德謝了。遂取路出梁城。忽見塵頭蔽日、漫山塞野軍馬來到。玄德迎之、乃是操軍也。直到中軍旗側、下馬拜迎、操亦下馬答之。說失沛城、散二弟陷老小、操亦下淚。更說劉安殺妻爲食之事。⑥操令孫乾以金百兩賜之。（李卓吾本・第十九回）。

突然ある家で宿を借りることにした。その家からは若者が恭しく出てきたので、名を問うと、狩人の劉安という者であった。①聞くと同宗の者で、豫州の牧がお見えになったので獲物を探し獻じようとしたが手に入らず、自分の妻を殺して獻上した。玄德が、「これは何の肉でしょうか」と聞いた。劉安は、「狼の肉でございます」と言った。〔劉安もまた奇である。〕二人はすべて平らげた。夜も更けたので休んだ。翌朝にその場を去るために、裏庭へ馬を取りに行くと、③殺された妻の遺體が廚のところにあり、腕の肉がすっかり削がれているのを目にした。玄德はそのことを（劉安に）尋ね、昨夜食べたのが彼の妻の肉であったことをようやく知った。④（玄德は）痛く悲しんで馬に乘ると、⑤劉安を一緒に連れて行こうとした。劉安は、「老いた母がおりますので、遠くへは參ることができません」と言った。玄德は禮を述べた。そこで梁城への道に入った。すると突然日を遮るような砂塵をまきあげ、野にも山にも邊り一面に廣がる無數の人馬がやってくるのが見えた。玄德がそれを迎えると、曹操軍であった。中軍の旗の側まで入っていき、馬から下りて挨拶をすると、曹操もまた馬から下りてそれに答えた。沛城を失い、二弟とはぐれ妻を見失ったことを話すと、曹操もまた涙を流した。さらに劉安が妻を殺して獻上してくれたことを話した。⑥曹操は金百兩を劉安に賜うよう孫乾に命じた。

毛宗崗本は、大きくこれを書き換え、多くの評を付けている。

一日、到一家投宿。其家一少年出拜、問其姓名、乃獵户劉安也。【是喜吃野味人。】當下劉安聞豫州牧至、欲尋野味供食、一時不能得、【野味難得、不若家味之便。】乃殺其妻以食之。【奇絶。古名將亦有殺妻饗士者。婦人不幸生亂世、遂使命如草菅、哀哉。玄德以妻子比衣服、此人以妻子爲飲食、更奇。】玄德曰、此何肉也。安曰、乃狼肉也。【人有溺愛悍妻者、但知妻是肉、不知妻是狼、當以劉安之法處之。若在懼内者言之、當名曰、獅子肉。】❷玄德不疑、遂飽食了一頓。【曹操在呂奢家誤認猪是人、玄德在劉安家誤人是狼。曹操不曾吃得一塊猪肉、玄德飽吃一頓人肉。不食猪肉者反是悪人、吃人肉者反不失爲好人。】天晩就宿。【不知劉安此夜如何睡得着。】至曉將去、往後院取馬、❸忽見一婦人殺於廚下、【不意取馬反忽見狼。】臂上肉已都割去。【昨宵深得此一臂之力、玄德髀肉可復生。此婦臂肉安得復生耶。】❷玄德驚問、方知昨夜食者、乃其妻之肉也。【設或不見不問、則劉安終不使玄德知之。其立念比殺妻饗士者更奇。】❹玄德不勝傷感、洒涙上馬。❺劉安告玄德曰、本欲相隨使君、因老母在堂、未敢遠行。【又是孝子。】玄德稱謝而別。取路出梁城。忽見塵頭蔽日、一彪大軍來到。玄德知是曹操之軍、同孫乾徑至中軍旗下、與曹操相見。具説失沛城、散二弟、陷妻小之事、操亦爲之下涙。又説劉安殺妻爲食之事、❻操乃令孫乾以金百兩往賜之。【千金買駿骨、百金謝狼肉。一上黄金台、一飽劉君腹。劉安得此金、又可娶一妻矣。但恐無人肯嫁之耳。何也、恐其又把作野味請客也。】（毛宗崗本・第十九回）

ある日、ある家で宿を借りることにした。その家から若者が恭しく出てきたので、姓名を問うと、狩人の劉安という者であった。【獲物を食べるのが好きな男だ。】劉安は豫州の牧がお見えになったと知るや、獲物を探して獻上しようとしたが、この時は手に入れることができず、【獲物を得ることは難しいが、家の味を得ることは簡單だ。】そこで自分の妻を殺して獻上した。【奇絶だ。古く名將の中には妻を殺して振る舞った者もいる。婦人は不幸にも亂世に生まれると、野草のように扱われるのだから、哀れだ。玄德は妻子を衣服に例えたが、この者は妻を食事にしたのだから、さらに奇である。】玄德が、「これは何の肉でしょうか」と聞いた。劉安は、「狼の肉でございます」と言った。【氣性の荒い妻を溺愛する夫は、た

だ妻は肉だということを知っているが、妻が狼だということは知らない。劉安の考えに基づいてこれを狼とした。もし恐妻家がこれを言えば、名付けて獅子肉となるはずである。】❷玄德は疑わず、そこで腹一杯になるまで食べた。【曹操は呂奢の家で猪を人と勘違いしたが、玄德は劉安の家で人を狼と勘違いした。曹操はかつて猪の肉を食べなかったが、玄德は人の肉を腹一杯食べた。猪の肉を食べなかった者がかえって悪人で、人の肉を食べた者がかえって善人のままである。】夜も更けたので休んだ。【劉安がこの夜よく眠れたのかどうかは分からないが。】翌朝になって去ろうと、裏庭へ馬を取りに行くと、❸婦人が厨のところで殺され、【不意に馬を取りに行ったら狼に會った。】腕の肉がすでにすっかり削がれているのを目にした。【昨夜遅くにこの臂の力を得て、玄德の髀肉はまた生き返ることができた。この婦人の臂の肉は元に戻ることがあろうか。】❷玄德は驚いてそのことを（劉安に）尋ね、昨夜食べた肉が、彼の妻の肉であったことをようやく知った。【ひょっとしたら見ない聞かないでいたならば、劉安は最後まで玄德に知られることはなかった。その信念は妻を殺して振る舞った者よりもさらに奇である。】❶玄德はあまりの悲しみに打ちひしがれ、涙を流して馬に乘った。❺劉安が玄德に、「もともとは君にお仕えしてお供致したいところなのですが、老いた母がおりますので、遠くへ參ることはかないません」と言った。【また孝子である。】玄德は禮を述べ別れた。梁城への道に入った。すると突然日を遮るような砂塵をまきあげ、無數の大軍がやってくるのが見えた。玄德は曹操の軍だと分かると、孫乾とともに中軍の旗のところまで入っていき、曹操に對面した。沛城を失い、二弟とはぐれ、妻と子供を見失ったことを話すと、曹操もまた涙を流した。さらに劉安が妻を殺して獻上してくれたことを話した。❻曹操は孫乾に命じて金百兩を劉安に屆けさせた。【千金で駿馬の骨を買い、百金で狼の肉に禮をした。馬の骨は黄金の台に飾られ、狼の肉は劉君の腹をいっぱいにした。劉安はこの金を得て、また一人妻を娶ることができる。ただ怖く誰も嫁に來ないであろう。なぜなら、また獲物にされて客に出されてしまうからである。】

毛宗崗本は、第一に李卓吾本にある、劉安が劉備と①「同宗の者」であるという記述を削除する。妻を殺して、その肉

を食べさせる劉安を劉備の「同宗」と記せば、劉備の仁に傷がつくためである。第二に、李卓吾本にはない❷「玄德は疑わず」、❷「玄德は驚いて尋ね」という言葉を加え、劉備が人肉と知らずに食べたことを強調する。第三に、女の遺體を見つけるところで、李卓吾本では③「妻」という言葉が使われており、あたかも玄德が妻の遺體であることが、見てすぐに分かったような描寫となっているが、毛宗崗本は、❸「婦人が廚のところで殺され」とすることで、遺體を發見した段階では、まさか劉安の妻の遺體とは想像もしていない劉備が表現されているのである。

さらに、第四に毛宗崗本は、劉安が妻を殺して食べさせてくれたことを知った劉備の衝撃の大きさや悲しみを強調するため、李卓吾本では、④「痛く悲しんで馬に乘る」となっている箇所を❹「玄德はあまりの悲しみに打ちひしがれ、涙を流して馬に乘った」と書き換え、劉備が劉安の行爲を知って、いかに嘆き悲しだかを強調している。

そして、第五に、李卓吾本にある⑤「劉安を一緒に連れて行こうとした」という記述を毛宗崗本は削除する。劉備が劉安を誘ったとは明記されていないのである。また、すぐに次の話題が提示されないことで、劉備の受けた衝撃の餘韻も表現されている。毛宗崗本において劉備は、李卓吾本と同様、劉安の行爲に感謝してはいるが、自分の妻を殺害するという行いを手放しで賞贊するかのような李卓吾本の描寫は、劉備の「仁」の人という人物形象を作り上げる上で、不都合であるため、毛宗崗本は劉安を誘う記述をあえて取り入れなかったのである。

第六に、劉安の行動を劉備から聞いた曹操は、劉安に褒美として金百兩を與えるが、毛宗崗本は、❻「孫乾に命じて」直々に持って行かせる記述に書き變えている。これにより、曹操の劉安の行爲に對する賞贊ぶりが、李卓吾本よりも强調される。曹操は、劉安の行爲を知って深い悲しみを抱いた劉備と對照的に描かれ、妻よりも忠を優先する人物を絶贊し、何よりも忠を最優先する人物として描かれているのである。

このように、妻を犧牲にして劉備の命を救った劉安を李卓吾本は高く評價する。しかも、劉備が臣下になるよう誘っているように、妻を殺して成した忠を「仁」の人劉備が高く評價する表現となっている。これに對して、毛宗崗本は、劉備の「仁」を明確に描くため、夫人の肉とは全く想像もせずに食べたように表現を改め、劉安を誘う記述も削除し、妻を殺した劉安の行いに悲しみ、戸惑う劉備を描いている。さらに、

曹操の劉安への評價は、李卓吾本よりも高くしており、妻を殺してでも忠を盡くそうとする人間を高く評價する曹操の姿が描かれ、劉備の「仁」と曹操の「惡」が强調されている。

そして、毛宗崗本は、總評において劉安を次のように評價する。

（齊の桓公の料理人であった）易牙は子を殺して君主を饗したが、管仲は人の情としてこれを非と考え近づけることはなかった。劉安の事は、まさに同じではなかろうか。（わたしは）同じではないという。易牙は利のため、❶劉安は義のためだからである。君主が食を絶たれているわけではないのに、易牙がその子を烹たことは人の情ではない。君主が食を絶たれたさいに、介之推が（晉の文公のために）自らその腿の肉を割いたことは過ちではない。そうであっても、呂布が妻（を捨て戰いに出ず）に連綿としたのは甚だ愚かであり、❷劉安が妻を殺したのは甚だ忍（むご）いことである。唯だ玄德だけはその中庸を得ている。（長坂坡の時のように妻子を）棄てざるをえなければこれを棄てるのは、どうして必ず兄弟の誓のように生死を共にすることはないためである。もとより呂布より學ぶべきことなどはない。（妻子の命を）保てるときにはこれを保ち、また誰が（妻子を）衣服のようで手足には及ばないと云うであろうか。また劉安より學ぶべきこともない。[16]

このように、總評は、齊の桓公においしいものを食べさせるために子を煮た易牙に比べて、劉安の行爲には❶「義」があると評價するものの、妻を殺す行爲は❷「甚だ忍（むご）いこと」であり、妻子を置いて逃げざるを得ない劉備とは異なる、として劉安に高い評價を與えることはない。評中に、呂布の事例を揭げるのは、李卓吾本の評が、劉安の行爲を呂布と比較して、評價しているためである。[17]

それでは、毛宗崗本は、女性の忠の全體について、どのように考えているのであろうか。忠には限定されないが、毛宗崗本・第一百十八回の總評では、評價すべき女性として十五名が擧げられている。

三國の人才の盛んなことは、ただ男子の中にこれを見るだけではなく、また婦人の中にこれを見ることができる。……魏の才婦は五人あり、❶姜敘の母、❷趙昂の妻、❸辛敞の姉、❹夏侯令のむすめ、❺王經の母がこれである。吳の才婦は三人あり、❻孫策の母、❼孫翊の妻、❽孫權の妹がこれである。漢の才婦は五人あり、❾先主の夫人の糜氏、❿北地王の夫人の崔氏、⓫武侯の夫人の黃氏、及

び⑫徐庶の母、⑬馬邈の妻がこれである。臨機應變の謀略をなした⑭貂蟬のような者や、聰慧であること⑮蔡琰のような者も、またその下に位置づくだけである。[18]

毛宗崗本が總評に掲げる婦人の人才は十三人で、⑭貂蟬・⑮蔡琰よりも上であるという。それぞれどのような事跡を持つか、簡單に整理しよう。なお、（）内は、『演義』の主要登場回數である。

曹魏に屬する者は、五名である。①姜敍の母（六四）は、本稿の二で檢討したように、曹操への忠を盡くした人物である。②趙昂の妻［王氏］（六四）も、本稿の二で檢討したように、曹操への忠を盡くした人物である。③辛敞の姉［辛憲英］（一〇七）は、司馬懿のクーデタに對して、曹爽への忠を盡くすよう助言し、弟を生き殘らせた者で、曹爽への忠を盡くした人物である。④夏侯令のむすめ［曹文叔の妻］（一〇七）は、再婚を拒否して鼻をそぎ落とした者で、守節した人物である。⑤王經の母（一一四）は、曹髦に忠を盡くした王經と共に處刑された者で、曹髦への忠を盡くした人物である。

孫吳に屬する者は、三名である。⑥孫策の母［吳太夫人］（二九）は、于吉に崇られる孫策へ祈禱した者で、子への愛を貫いた人物である。⑦孫翊の妻［徐氏］（三八）は、才色兼備で、孫翊の仇を討った者で、夫の仇討ちをした人物である。⑧孫權の妹［孫夫人］（八四）は、劉備の妻であり、劉備が死去して自殺した者で、[19]蜀漢への忠を盡くした人物である。

蜀漢に屬する者は、五名である。⑨糜夫人（四一）は、井戸に身を投げて劉備の繼嗣劉禪を守った者であり、[20]蜀漢への忠を盡くした人物である。⑩北地王の妻［崔夫人］（一一八）は、蜀漢の滅亡時に、夫の劉諶とともに自害した者で、蜀漢への忠を盡くした人物である。⑪諸葛亮の黃夫人（一一七）は、諸葛瞻へ「忠孝に勤めよ」との教育を行った者で、[21]蜀漢への忠を盡くした人物である。⑫徐庶の母（三六）は、本稿の一で檢討したように、後漢への忠を盡くした人物である。⑬馬邈の妻［李夫人］（一一七）は、劉禪を見放す馬邈に戒め、馬邈が鄧艾に降伏すると自殺した者で、蜀漢への忠を盡くした人物である。

これら、魏吳蜀の婦人と比較されている⑭貂蟬（九）は、父のように育ててくれた王允への孝のため、身を汚して董卓を打倒した者で、[22]後漢への忠、王允への孝を盡くした人物である。⑮蔡琰（七一）は、匈奴から曹操が買い戻し、その文學の才能を評價した者で、文學の才に秀でた人物である。

このように、毛宗崗本が高く評價する女性十五人のうち、

「忠」以外で評價される者は、④夏侯令のむすめ・⑥孫策の母・⑦孫翊の妻・⑮蔡琰の四名に過ぎない。これに對して、後漢への忠を成した⑫徐庶の母と⑭貂蟬、および蜀漢への忠を成した⑧孫權の妹・⑨糜夫人・⑩北地王の妻・⑪諸葛亮の黄夫人・⑬馬邈の妻をあわせた漢への忠を行った者は、十五例中七例を占める。そして、二で檢討したように①姜敍の母と②趙昂の妻の曹操への忠は、李卓吾本に比べて低められていた。毛宗崗本における女性の忠は、漢への忠を最上のものとして描いていることが分かる。

おわりに

蜀漢を正統とする『演義』が、關羽に代表される義を宣揚するとともに、漢への忠を中心として描く文學であることは言うまでもない。たとえば、諸葛亮の忠は、陳壽が「出師表」を中心に置くように、『三國志』の主題でもあり、『演義』においても、十二分に强調されている。

毛宗崗本は、そうした漢への忠の尊重を女性の表現にまで行き屆かせていく。李卓吾本では、漢への忠と同樣に高い評價がされていた曹操への忠の價値を下げ、蜀漢を正統とするという物語の中軸をぶれることなく表現するのである。また、徐母の忠を强調するあまりに、徐庶の孝を結果として貶めている李卓吾本の表現を改めて、忠と孝の狹間に苦しむ徐庶の葛藤を救い出し、何のためらいもなく徐庶を送り出す劉備の仁に傷がつかない配慮をしている。毛宗崗本は、三絶と位置付ける曹操・關羽・諸葛亮の人物像を明確に描くとともに、漢を代表する劉備の「仁」としての側面をも明確に描くため、忠の表現を工夫しているのである。

物語の細部まで主題が統一的に表現されていることが、文學としての完成度を示す指標の一つであるならば、毛宗崗本は、李卓吾本を代表とするそれまでの『演義』に比べて、完成度の高い文學作品と言えよう。

〈注〉

（1）「義絶」關羽の義を際立たせるために、忠の屬性を關羽の表現から毛宗崗本が削除している事例が多いことについては、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』に描かれた關羽の義」（『東方學』一二六、二〇一三年）、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』における「關公秉燭達旦」について」（『三國志研究』九、二〇一四年）を參照。

（2）中國近世において女性が最も重視すべきとされていた貞節が、孝よりも優先されない場合があることについては、仙石

知子「中國女性史における孝と貞節—近世譜にあらわれた女性觀を中心に」（『東アジアにおける「家」—傳統社會と現代社會』大東文化大學、二〇〇八年）、仙石知子「『醒世恆言』卷三十六「蔡瑞虹忍辱報仇」に描かれた孝と貞節」（『中國女性史研究』一八、二〇〇九年）を參照。

（3）尾形勇『中國古代の「家」と國家』（岩波書店、一九七九年）を參照。

（4）昱曰、徐庶爲人至孝。【求忠臣、必於孝子之門。庶既孝子、卽安肯爲操用乎。】幼喪其父、止有老母在堂。現今其弟徐康已亡。老母無人侍養。丞相可使人賺其母至許昌。令作書召其子、則徐庶必至矣。【不以丞相召之、而以母召之。固知庶之不可召也。】（毛宗崗本・第三十六回）。毛宗崗本は、醉耕堂本を底本とする『四大奇書第一種三國志演義』（中華書局、一九九五年）を使用し、時に刋本にあたって確認した。なお、李卓吾本は、蓬左文庫に所藏される吳觀明本の『李卓吾先生批評三國志』（ゆまに書房、一九八四年）を使用した。なお李卓吾本の評は〔　〕で示す。

（5）渡邊信一郎「孝經の制作とその背景」（『史林』六九—一、一九八六年、『中國古代國家の思想構造—專制國家とイデオロギー』校倉書房、一九九四年に所收）。

（6）漸離以築擊秦皇、而秦皇殺漸離。徐母以硯擊曹操、而曹操不敢殺徐母。是徐母之威更烈於漸離矣。張良擊秦不中、而不見執於秦。徐母擊操不中、而拼見執於操。是徐母之膽更壯於張良矣。奇婦人勝似奇男子、不獨列女傳中罕見之、卽豪士傳中亦罕見之（毛宗崗本・第三十六回・總評）。

（7）曹操不强留關公、以全其兄弟之義。玄德不强留徐庶、以全其母子之恩。兩人之心同乎。曰、不同。曹操之於關公、佯縱之而陰阻之、及阻之不得而後送之。若玄德之於徐庶、則竟送之而已。且曹操深欲袁紹之殺玄德、而玄德惟恐曹操之殺徐母。一詐一誠、相去何啻天淵。（毛宗崗本・第三十六回・總評）。

（8）蔡瑁假玄德之詩而劉表疑之。程昱假徐母之書而徐庶信之。豈庶之智不如表哉。情切於母子故也。緩則易於審量、急則不及致詳。疏則旁觀者清、親則關心者亂。若徐庶遲疑不赴、不成其爲孝子矣。故君子於徐庶無譏焉。（毛宗崗本・第三十六回・總評）。

（9）徐元直不奇、其母大奇。眞元直之母也、可敬可敬。若是單福又安得此母乎、一笑一笑。（李卓吾本・第三十六回・總評）。このあと、李卓吾本の總評は、徐庶が「大賢」であるとしているが、それは諸葛亮を推薦したことに關わる評價であって、徐母との比較においては、徐庶は貶められている。

（10）徐庶之母與王陵之母、皆賢母也。陵母之死、恐其子之歸楚。庶母之死、怒其子之歸曹。然庶母不死於曹操召見之初、而死於徐庶既歸之日、或恨其死之晚矣。豫曰、不然。曹操非項羽比也、羽直而操詐。庶母卽欲先死以絕庶之望、而奸詭如操、何難祕之而不使庶知。又何難於母死後假作母書以招庶乎。此不得爲庶母咎也。（毛宗崗本・第三十七回・總評）。

(11)　毛宗崗本は、曹魏への忠を高く評價する場合もある。第一百十四回では、王經とその母の曹魏への忠を高く評價しているが、それは、王經が蜀漢を滅ぼす司馬昭に抵抗して曹魏を守ろうとしたためである。そして、王經を讃える詩は、李卓吾本のまま削除されずに毛宗崗本にも記載されている。

(12)　同じく第六十四回の李卓吾本が「(楊阜)諫曰、超等叛君無父之徒、此城中之人有死無二」とするところを、毛宗崗本は「參軍楊阜哭諫曰、超等叛君之徒、豈可降之」と書き換えている。

(13)　楊阜之爲韋康報仇、義也。而其攻馬超以助曹操、則非義。馬騰兩番受詔、兩番討賊、固漢之忠臣也。其子之欲雪父恨則孝、承父志而討國賊則忠。奉一欺君罔上之曹操、而攻一忠孝之馬超、以超爲賊、而不知操之爲賊、故楊阜之義、君子無取焉。(毛宗崗本・第六十四回の總評)。

(14)　人謂姜敘之母同於太史慈之母。慈之母勉其子以報孔融、敘之母勉其子以報韋康。此則其可嘉者也。我謂姜敘之母、異於徐庶之母。❶庶之母知操之爲賊、敘之母不知討操者之非賊、而助操者之爲賊。此則其可惜者也。人謂趙昂之妻異於呂布之妻。布之妻阻其夫之出戰、昂之妻勵其夫以起兵。此則其可嘉者也。我謂趙昂之妻同於劉表之妻。❷表之妻背劉備而從曹操、致其身與子俱死。昂之妻助曹操以攻馬超、身幸免於死、而亦致其子於死。此又其可惜者也。雖然郭嘉・程昱等輩、天下所稱智謀之士。猶然不明順逆、而何論於婦人哉。尙論者於楊氏・王氏可勿譏云。(毛宗崗本第六十四回・總評)。

(15)　李卓吾本も第一百十四回の總評で、王經の母子と王陵の母とを比べながら、漢への忠と曹操への忠とは重さが異なり、漢への忠が重要であることを述べている。しかし、そうした主張が、表現の次元において十分に發揮できていないのである。自らの主張を表現しきれていないという點において、李卓吾本の文學としての完成度は低いと言わざるを得ない。

(16)　易牙殺子以饗君、管仲以爲非人情不可近。劉安之事、將毋同乎。曰、不同。牙爲利也、❶安爲義也。君非絶食、則易牙之烹其子爲不情。君當絶食、則介之推自割其肉不爲過也。雖然、呂布之戀妻也太愚、❷劉安之殺妻也太忍。唯玄德爲得其中。不得不棄而棄之、何必如兄弟之誓同生死、固不當學呂布。得保則保之、又誰云衣服之不及手足、亦不當學劉安。(毛宗崗本・第十九回・總評)。

(17)　『李卓吾本』第十九回・評に、「劉安殺妻、固非中道。猶勝呂布因妻而殺身者也。(劉安が妻を殺したことは、もとより中道ではない。(しかし)なお呂布が妻のために身を殺したことよりは勝る)」とある。

(18)　三國人才之盛、不獨於男子中見之、又於婦人中見之。……魏之才婦有五、❶姜敘之母、❷趙昂之妻、❸辛敞之姊、❹夏侯令之女、❺王經之母是也。吳之才婦有三、❻孫策之母、❼孫翊之妻、❽孫權之妹是也。漢之才婦有五、❾先主之夫人糜氏、❿北地王之夫人崔氏、⓫武侯之夫人黃氏、及⓬徐庶之母、⓭馬邈之

妻是也。至於權變如⑪貂蟬、聰慧如⑮蔡琰、又其下者耳。（毛宗崗本・第一百十八回・總評）

(19) 孫夫人については、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』に描かれた女性の義と漢への義―貂蟬の事例を中心として」（『狩野直禎先生傘壽記念三國志論集』三國志學會、二〇〇八年）で詳論した。

(20) 糜夫人については、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』における母と子の表現技法」（『駿河台大學論叢』三九、二〇〇九年）で詳論した。

(21) 黄夫人については、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』における母と子の表現技法」（前掲）で詳論した。

(22) 貂蟬については、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』に描かれた女性の義と漢への義―貂蟬の事例を中心として」（『狩野直禎先生傘壽記念三國志論集』三國志學會、二〇〇八年）、および仙石知子「明清女性史研究と毛宗崗本『三國志演義』」（『中國―社會と文化』二九、二〇一五年）で詳論した。

〈キーワード〉三國志演義、毛宗崗本、忠義、徐母、忠孝